

触ってみたい、やってみたい 山鳩保育園（京都府八幡市）

< 0歳児 >

0歳は、生活そのものが感覚遊びで、毎日見るもの、触るもの、食べるものすべてが、愛着、信頼関係の基となり、保育士とのかかわりの中で、情緒が安定し豊かな生活体験を繰り返すことにより、すべての感覚が養われ、研ぎ澄まされている。

<事例：触った> せんせいの顔

大好きな先生にタッチ。さらに、先生を見つめてソーッと手を伸ばすと先生の口。「口が動いた、声が聞こえる、面白い」「もう1回」と繰り返す。

次は「目」と場所を変え、自分なりに納得してから次々試している様子。「動く?」「何?」「これが先生」「ここ何?」面白くて、確かめたくて、触りたくて繰り返している。

「心も動いている」科学する心につながっているのではと思う。



<事例：触った> スイカ



芋掘りのサツマイモ畑を提供してくれるおじさんから、たくさんスイカを頂き、保育室に置いた。「この物体は何?」「触ってみよう」など子どもたちは思い思いの触り方をしている。そして、大きさ、量感、質感、色、形など全身で感じ取っているようなさまざまな姿が見られ、まさに「スイカ探検隊」のようだ。

<事例：やってみたい> 蕪の栽培：土を入れる

幼児クラスに混じって蕪の栽培に挑戦…。といっても砂遊びの延長のようで、土作りの山からせっせと土をスコップですくってプランターに入れる。途中で土がこぼれたりするが、何度も繰り返し、入れるたびに保育士の言葉を待っている。保育者の言葉「いっぱい入れたねえー上手だねー」を受けて、又せっせと土の山へ…。幼児クラスの子どもたちの中で同じように活動している姿はほほえましい。

今度は土を湿らせるために、水をまく。子どもたちはジョウロを手にとると、水道へトコトコ…。幼児クラスのお兄ちゃんたちが水を入れてくれたが、重すぎて、その場にほとんどこぼれてしまう。プランターにまける水はほんの少しになる。

ジョウロを持つ手を返すのも結構難しく、それを見ていた幼児クラスの子どもたちは「次はちょっとにするからな」と少しだけ水を入れてくれた。ほんとは自分で入れてみたかったのかもしれない。

<事例：やってみたい> 蕪の栽培：種まき

「蕪の種だよ」と保育士がまいて見せた後に種を手のひらに渡す。

手のひらの「種?」を見て、いきなりパッと手を払うように播いて?いた。手に残ったタネは服で振り払う姿も見られた。スコップで土をならして仕上げる作業を見て同じようにスコップで…。プランターの畑は穴だらけ、どんな風に芽が出てくるだろう。



<事例：やってみたい> 蕪の栽培：水やり

「水やりをする人」と聞くと帽子を催促する子どもたち。靴をはかせてもらったら、ジョウロを持って水道の蛇口に入れるようにして、保育士が来るのを待っている。

毎日繰り返すと、工程も手馴れた様子になる。「大きくなーれ」の保育士の言葉に合わせて声をかける。

<事例：やってみたい> 蕪の栽培：収穫・食べる

収穫の日“大きな蕪”の絵本の掛け声で「うんとこしょ、どっこいしょ」と言うが、実際は葉っぱがプチプチ切れるだけ…。

それでも保育士と一緒に全部抜いた。

蕪を生でかじると顔がゆがんだが「美味しい？」

の声かけにうなずき、ガジガジ…

「苦い？」の声にもうなずきながら食べていた。

葉っぱは姿を変えて(調理)、給食の時に出したが「蕪の葉っぱだよ」といってもきよとん。

味がついているのでこちらのほうが美味しく食べていた。次の収穫では、目の前で調理する。



みどころ

「触ってみたい」「やってみたい」「まねしたい」という思いが、いろいろな場面で見られる頃です。言葉がとても少ないので、保育者は子どもたちの表情や動き、視線から、興味や思い、心の動きを感じ取り受け止めています。子どもたちも、そうした保育者に受け止めてもらっている安心や信頼関係を感じ、自分から行動に表して、興味をもったものにかかわっています。安定した楽しい生活をする中で、身の回りの人やものから様々なことを感じて、心を動かしていることが分かります。